視点

災害時の心理学～正常性バイアス

国土交通委員会　専門員

林（はやし）　浩之（ひろゆき）

災害が多かった時代と言われた平成から、令和へと元号は改まったが、その後も、山形県沖や福島県沖などで地震が発生し、九州地方を中心に西日本地域で記録的な豪雨に襲われるなど自然災害の脅威は続いている。また今後 30 年以内に発生する確率が 70～80％といわれる「南海トラフ地震」や、首都圏直下型地震も懸念されるところである。内閣府の中央防災会議が 2012 年に発表した南海トラフ地震による被害想定では、死者・行方不明者数は約 32 万 3,000 人、全壊焼失棟数は約 238 万 6,000 棟（ともに被害が最大となるケース）に上るとしていた。東日本大震災の死者・行方不明者が約２万 2,000 人、関東大震災の死者・行方不明者が約 10 万 5,000 人ということを考えると、その数字の大きさは衝撃的である。

災害時の心理学を研究する東京女子大学の広瀬弘忠教授によると、日本でも欧米でも、災害の被害を避けるために避難の指示や命令などが発令されても、避難する人びとの割合が 50％を超えることはほとんどないという調査結果があるという。平成 30 年 7 月豪雨でも最大で約 860 万人に避難勧告等避難行動を促す情報が出されたが、自治体により避難所に避難していることが確認された人数は、避難勧告等対象人数に対し約 0.5％であったという。兵庫県立大学の阪本真由美教授らが山陽新聞社とともに岡山県真備町で行ったアンケート調査によると、避難しなかった理由として、「車などの移動手段がなかったから（約３％）」、「病気などで体を動かすことが困難だったから（約３％）」などの物理的理由とともに、「これまで災害を経験したことはなかったから（30％強）」、「２階に逃げれば大丈夫だと思ったから（25％強）」などがあげられている。

私たちの心は、ある範囲までの異常は、異常だと感じずに、正常の範囲内のものとして処理するようになっている。このような心のメカニズムを「正常性バイアス」と言う。もともとは、私たちが過度に何かを恐れたり、不安にならないために働いているはずなのだが、災害時には、「まだ大丈夫」、「自分だけは大丈夫」、「今まで問題なかったから今回も大丈夫」という勝手な思い込みの元となり、避難が遅れる原因となるという。

内閣府の中央防災会議は、本年５月に、南海トラフ地震による被害想定につき再計算を行った試算を公表した。それによると、津波避難意識の向上、建物の建て替えや耐震改修、感電ブレーカーの普及などを踏まえ、死者・行方不明者数は 23 万 1,000 人に、全壊焼失棟数は 209 万 4,000 棟に改められたという。政府は、2023 年度までに南海トラフ地震による死者数を概ね８割、全壊棟数を概ね５割減らすことを目標としている。耐震改修や、インフラ改修による予防防災を進めるとともに、「自分は大丈夫」という思い込みに囚われず、一人ひとりが防災意識をより一層向上させることが求められている。